

## フィジー・トンガにおける遺跡踏査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7178">http://hdl.handle.net/2297/7178</a>

## フィジー・トンガにおける遺跡踏査

酒井 中(金沢大学大学院)

平成 19 年 9 月 11 日より 10 月 5 日までの間、フィジー・トンガの 2 カ国に赴いた。旅の目的は両国内の遺跡踏査、トンガ国内の資料調査、発掘調査候補地の選定と現地における文化財担当機関との接触にある。

9 月 11 日午後成田を立ち、フィジー (Fig.1) に到着したのは翌 12 日朝のことである。入国審査を終え、空港内でトンガへの往復チケットを購入すると、トランジットのために空港付近のホテルへと向かう。予約したホテルは以前にも泊まったことがあるホテルであるが今回は経営者がかわっていた。従業員に話を伺ったところ、昨年のクーデターや近年の中国資本の拡大により、オーナーが替わるホテルも珍しくないそうである。クーデターの影響は観光産業にとどまらず、労働法の改正により労働時間の上限が減らされたため、単独の仕事では生活が維持できない人やタクシー

ドライバーに転身する人が増えているとのことである。ナンディの治安はさほど悪化していないものの、首都スバでは治安の悪化が著しいという。

トンガに向けて出発するまでの間、旅の後半に訪れるヌクレカ遺跡とボウレワ遺跡へ行くため情報収集を行なう。ともにラピタ土器が出土したことで知られる有名な遺跡であるが、遺跡はおろか地名すら知る人も見つからない。

翌日は空港の南西側に広がるワイロアロア～ニュータウンビーチ (写真 1) を散策する。ビーチはナンディ川の河口に位置し、ワイロアロアビーチの南脇にはデナラウビーチリゾートホテルの護岸が築かれているためか、波は静かでビーチには砂や泥の堆積が著しい。干潮時に陸地化する場所を歩くと土器片や獣骨が集積している箇所が何箇所か確認できる。時代を特定できる遺物は見つからないものの、ある時期には集落が営まれていたのは間違いない。

9 月 14 日にナンディを離れ、スバ近郊のナウソリ国際空港経由で午後トンガ王国に入国。トンガ王国の首都ヌカアロファはトンガタブ島 (Fig.2) の北岸中央に位置する。

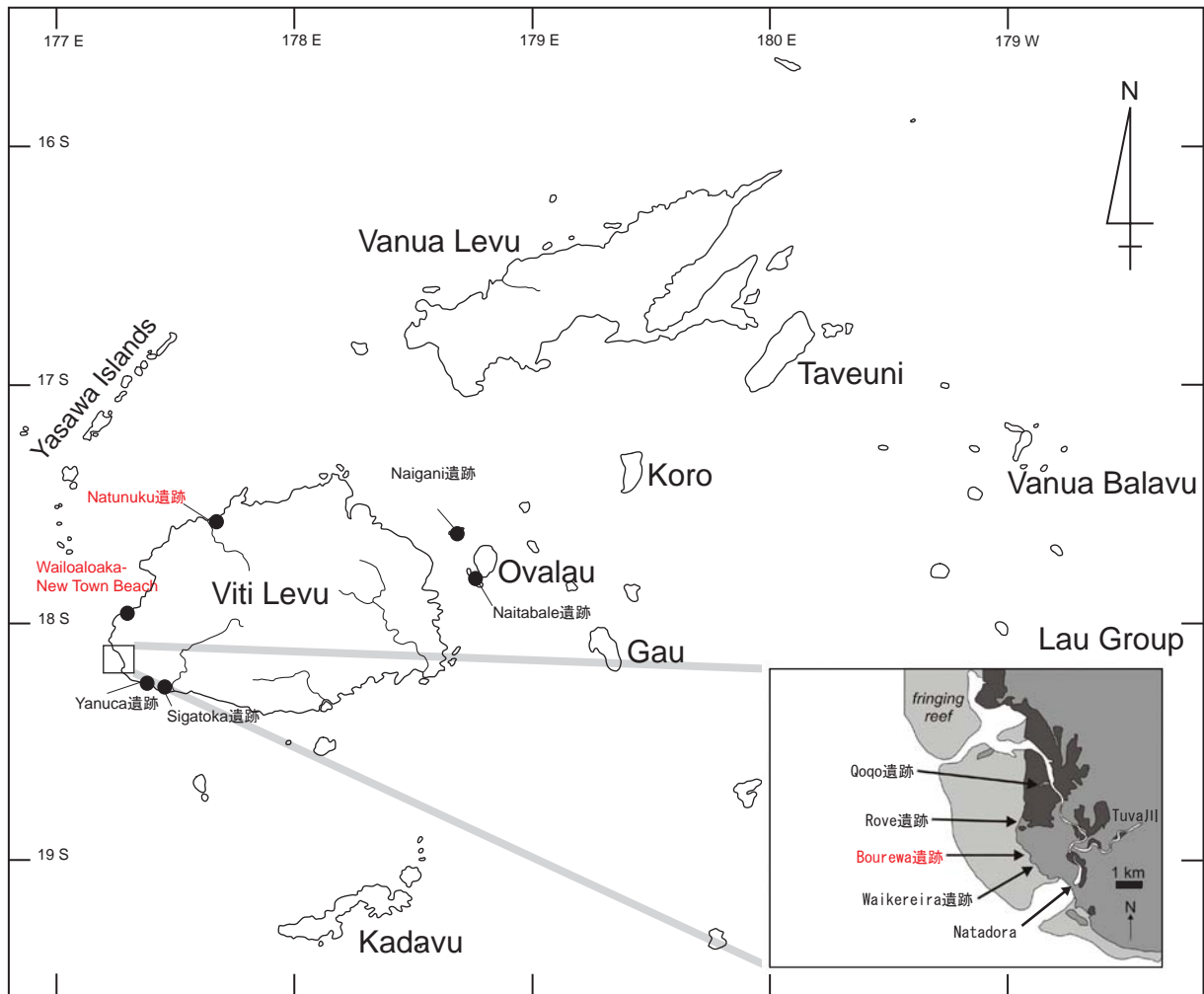


Figure 1. site map of Viti Levu, Fiji

空港から首都ヌクアロファまでは乗合タクシーがほぼ唯一の移動手段である。出稼ぎ先から一時帰国したトンガ人数人と相乗りでミニバスに乗り込む。日本で入手できる最新のガイドブックでは空港からヌクアロファまでの相場は15～20パアング（1パアング＝約60円）程度であるが、実際には一人あたり30パアングを請求される。原油価格の高騰に伴いタクシーの相場も上昇しているのだという。

ヌクアロファでの宿泊先を決めていなかったが、運良く日本人が経営するゲストハウスで宿を確保することができた。トンガ北部にあるババウ諸島への航空券を手配するため、ヌクアロファ中心部へ赴く。昨年の暴動により中心部にあった建物のいくつかは失われ、なくなった建物の隣には火災の痕が見られた。暴動の一旦ともなった中国移民の増加に伴い中国人経営の商店や飲食店が増えていた。航空会社で翌月曜日の便を手配できたが、スケジュールが頻繁にかわるため、注意してほしいといわれた。

翌日は、バスに乗ってトンガタブ島北西部に位置するヌクレカ村を訪れた。最長距離区間であるが料金はわずか2パアングである。ヌクレカ遺跡はファンガウタラグーンの内側入り口に位置し、波も静かで船でやってきた初期入植者が集落を構えるには絶好の場所に位置する。ヌクレカ村からラパハにかけて貝塚が点在している。ポールセンが

調査したモアラズ・マウンド (To-2) は現在の海岸線から約200m内陸にある、満潮位レベルより約1.5m高い場所に位置し、これまでも様々な考古学者がこの遺跡を踏査・発掘している。2000年には石村智氏ら日本人グループが表面調査を行なっている。ヌクレカ村首長が保管していた、これらのコレクションは2007年に当遺跡を発掘調査を実施したカナダ隊が本国に持ち帰っている（註1）。

貝塚が点在していること、干潮時にはサンドフラットのあちこちで遺物が採取できると聞いていたのだが、バスを降りて5分も立たないうちに、タウンオフィサーと名乗る男性に呼び止められる。こちらの目的を話すと、彼はカナダ隊が調査した地点（写真2）へと案内してくれた。発掘地点は民家の敷地内であり、土地所有者が庭で拾ったラピタ土器（写真3）を見せてくれた。タウンオフィサーは自宅へと案内し、自分の家の敷地内で採取した土器（写真4）を見せてくれた。タウンオフィサーに、トンガ国内における文化財行政を担当する機関とコンタクトが取れるようコーディネートを依頼し立ち去ろうとしたが、どこへ行くにもついてくるので満足に踏査もできない。そうしているうちに、ヌクアロファに戻る最終バスの時間になったので、その日の踏査を終了する。

17日早朝にゲストハウスをチェックアウトし空港に向かう



写真1 ワイロアロアビーチ



写真3 ラピタ土器（ヌクレカ遺跡）



写真2 ヌクレカ遺跡（カナダ隊の調査地点）



写真4 ラピタ土器（ヌクレカ遺跡）

が、チケット購入時に聞かされたとおり、飛行機は予定の3時間遅れで出発した。1時間半のフライトの後、ババウに到着した。ババウ諸島 (Fig.3) は、平坦なトンガタプ島やハアパイ諸島と異なり、起伏に富む島々からなる。特にババウ北部の島や海岸部の比高差数百 m に及ぶことも珍しくない。リーフも見られないため高い波が海岸線まで押し寄せ、砂浜が形成される場所は少ない。波も高く、食料

獲得が容易なリーフが発達していない場所は、初期入植者が上陸し集落を営むには適していない (写真 5・6)。

1996年に訪れたカパ島に再度赴くべくネイアフ〜カパ島間を往来する船を手配しようとしたが、現在はないという。カパ島 (写真 7) はパンガイモツ島の東に浮かぶ島である。ポールセンの報告書の中で、遺物が表採されたことが記されている。筆者も 1996年にこの島を訪れ、ファレバイ遺

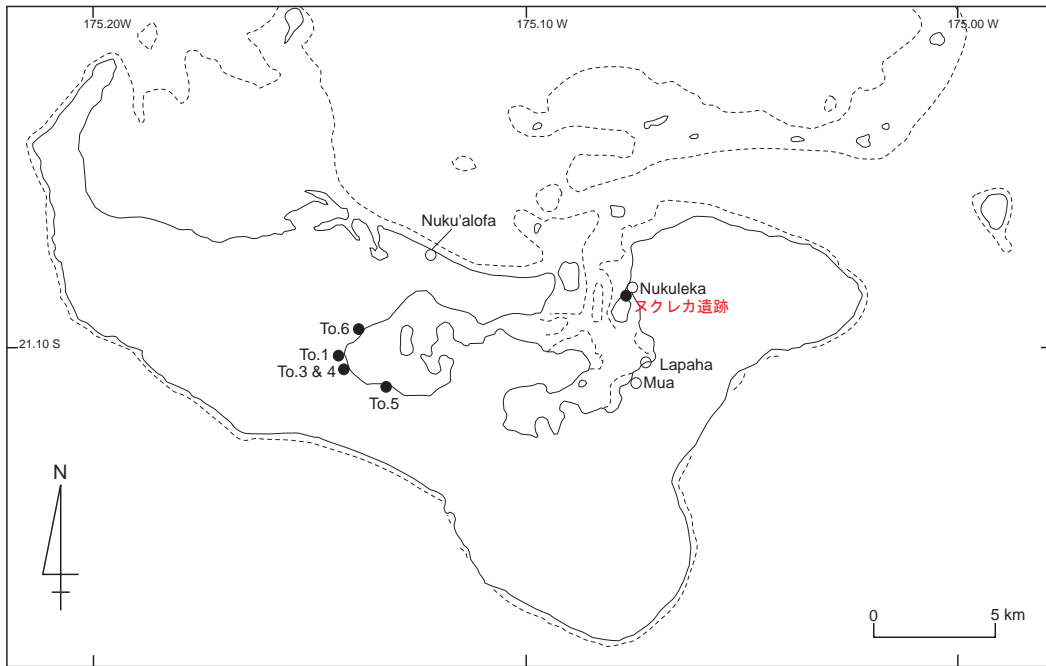


Figure 2. Site map of Tongatapu

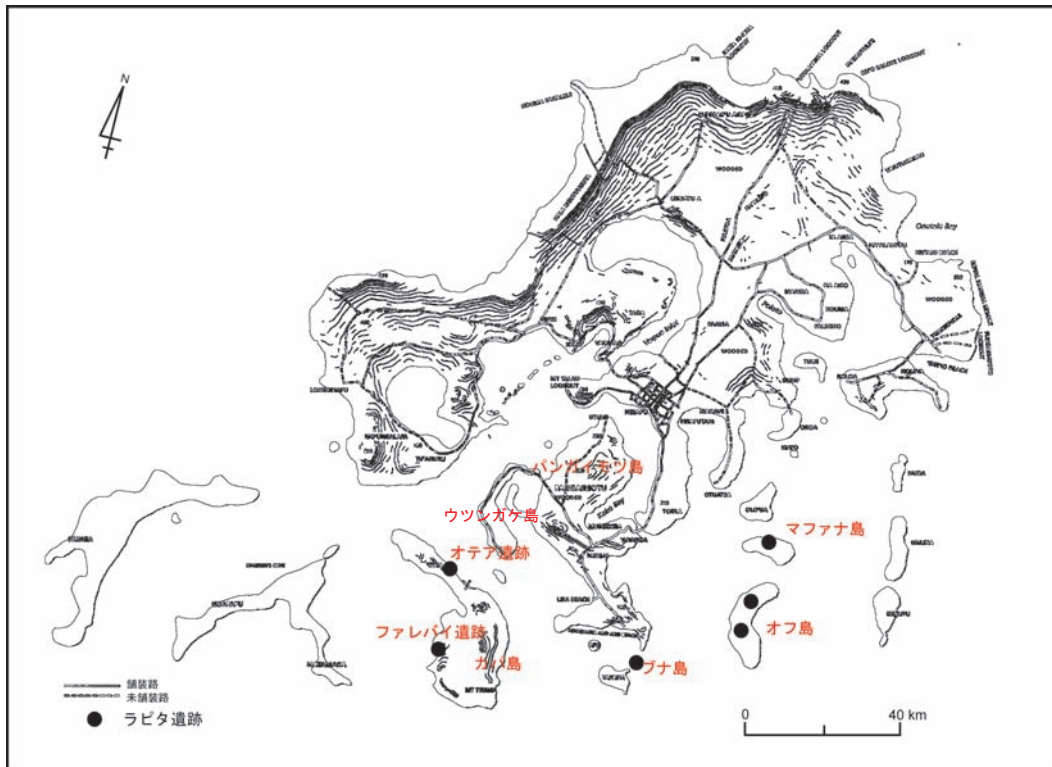


Figure 3. Site map of Vavau islands, Tonga

跡にて無文土器が散乱しているのを確認している。ファイレバイ遺跡はファレバイ村の南端のサンドビーチに立地する遺跡である。ビーチは内陸から海に向かって緩やかに傾斜し、背後は崖面が控えている。1996年に筆者が訪れた際には、傾斜面の上半に無文土器が地表面に散乱していた。

オテア遺跡はカパ島の東岸中央のやや北よりに位置する。2005年にカナダ隊が発掘調査を実施している。地表下約2mあまりのところ、ラピタ文化器の包含層および遺構を確認している。両遺跡とも、C14年代測定結果が報告されているが、出土遺物・遺構についての報告は行なわれていない。



写真5 オネタレ海岸(北から)



写真6 リクオネ海岸(西から)



写真7 ウツンガケ南東岸からオテア遺跡を望む

ブナ遺跡はパンガイモツ島の東沖合に浮かぶ小島であり、パンガイモツ島の南西部に小規模なビーチが点在する。パンガイモツ島の南東岸には大規模なラグーンが形成されている。2004年にD. バーレイが5週間を費やして発掘調査を行なっている。2007年にC14年代測定結果が報告されているが、出土した遺構・遺物の報告はまだ行なわれておらず、詳細は不明である。遺跡に行くには船が必要であるが、ブナ島を往復する船を見つけることはできず、上陸することはできなかった。

20日からはババウ南部のオフ島とマファナ島を訪れる。どちらの島もカナダ隊が発掘調査を行い、ラピタ遺跡を発見している島である。オフ島は島の東西両端でやや小高く切り立った崖が見られるが中央部は平らであり、現在の集落が帯状に展開している。島の周囲にリーフは発達していないが、周囲の海底は浅い。島の北岸はネイアフ島その他の島に面しており、波も静かである。2003年にカナダ隊は中心部の平坦な部分を試掘し、2地点で集落址を発見している(写真8・9)。遺物出土地点は、やや崖に向かって小高くなる部分のわきに位置する。両地点とも北側の海岸から約50~100mほど内陸に位置し、満潮位より1~2m高い黒砂が堆積している平坦な土地に位置する。両地点で表面調査を行なうも、わずかばかりの貝殻の微細片が散乱している以外に遺物は見られない。C14測定値が報告されているだけで、遺構・遺物については詳細不明であるが、土地の所有者の話によれば両地点とも地表下およそ1mで大量のラピタ土器や石器・貝製品が出土し、北側の試掘トレンチからは貝製の釣針も出土したそうである。これまでに発表された論文の中ではこの島のラピタ遺跡は一つの遺跡となっている。両地点は数百m離れたところに位置していること、地形から見て、ラピタ文化期にはオフ島は小さな二つの島からなっていた可能性も考えられ、別の遺跡である可能性も考慮すべきである。

22日はマファナ島を訪れる。現在この島には人は定住していないが、プランテーション経営が行なわれている。海岸線の大部分が切立った隆起サンゴであり、砂浜は島の北岸中央部の狭い範囲に1ヶ所が存在するのみである。プランテーションで仕事をしていた人の話によれば、2003年にカナダ隊が調査した地点もこのあたりのようである(写真10)。海岸から内陸におよそ10m入ったところに砂浜が1段高く、黒砂が堆積している箇所があり、そこで発掘調査を行なったと思われる。ビーチはサンゴの隆起により形成された崖に囲まれた、狭小なことから遺跡も小規模なもので

あったと推測される。

25日、夕方の便でヌクアロファに戻る。ババウ空港にはレーダーも滑走路照明もないため、夜間の飛行はない。例によって飛行機の到着が遅れ、ネイアフに戻って一泊することも覚悟しなければならなかったが、二時間遅れで飛行機が到着し、無事ヌクアロファに戻ることができた。

26日、ヴァイオラにある国立博物館を訪れる。9年前に訪れた際には、遺物展示はされておらず、ポスターパネルが数枚張られていただけであり、正直期待はしていなかったのだが、カナダ隊が過去に調査した遺物の一部が展示されていた(写真11)。展示品はラピタ土器・石器・貝製品で占められている。微細な破片が多いが、一点ものラピタ土器が展示されているのは南太平洋各地にある博物館の中でも、比較的多い部類に属すると思われる。展示責任者に写真撮影と実測の許可を求めたところ、快諾していただき、翌日から作業に取り掛かることにする。

ゲストハウスに戻ると、ヌクレカ村のタウンオフィサーからの連絡があったという。こちらから電話をかけると、トンガ政府の担当者との面会ができることになったので、明日の朝ゲストハウスに迎えに行くとのことであった。こちらも予定がある旨を伝えたが、変更はできないという。しかたなく博物館に予定の変更を伝える。

タウンオフィサーに Royal Palace Office の担当者に面会の手配をもらい、28日に面会の許可が下りる。

翌日、Royal Palace Office のアルバート・ヴァエア長官と面会する。こちらの意思を伝えたところ、指導教官、大学からの推薦状が必要であり、提出後に協議に入ることになった。午後、ゲストハウスに一旦戻ったのち博物館に赴いて、わずかな時間であったが遺物の写真撮影と遺物を数点実測する。

10月3日、フィジーに再入国した翌日であるが、ナツヌク遺跡を目指し、バスを乗り継ぎバに到着。バスターミナルからは、タクシーでナツヌク村を目指す。村の北東はずれにある小さな入り江にナツヌク遺跡は立地する(写真12)。入り江は隆起サンゴの上に黒砂が堆積した砂浜で地表面には土器片や貝殻が散乱しているが、鋸歯状押印文のあるラピタ土器は見あたらない。

10月4日はナンディから南西にある、ナタンドラビーチを目指す。ナタンドラビーチは白砂がひろがる広大な入り江である。ビーチの一角には現在大型のリゾートホテルが建設中である。入り江の部分だけは環礁は発達しておらず、海岸まで波が押し寄せる。ナタンドラビーチの脇からツヴァ川の河口にかけては環礁が発達し、小さな入り江が連続する。ポウレワ遺跡をはじめとするラピタ遺跡が点在し(写



写真8 オフ島(西から ドットは調査地点)



写真10 マファナ島(北西から ドットは調査地点)



写真9 オフ島 南側の調査地点(西から)



写真11 ラピタ土器(トンガナショナルセンター所蔵)

真 13・14)、これらの入り江のいたるところに土器片が散乱している。入り江の後背地は満潮位より約 1～2m 高く、平坦地が広がる。その後方には緩やかに起伏した丘陵が立地している(写真 15)。2004 年から南太平洋大学とフィジー博物館を中心とした調査チームが継続的に調査を行っており、大量の土器、石器、貝製品のほかに保存状態のよい埋葬人骨が発見されている。地表面で確認できた土器は無文の土器片ばかりであり、器壁の厚みや胎土・口縁部の形状などはバラエティーに富んでいる。ボウレワ遺跡はフィジー最古の遺跡(C14 年代測定の結果では紀元前 1220 年ごろに居住が開始されたとされる)としての側面が強調されて扱われることも多い。しかし実際には出土する土器の多くは無文の土器であり、時期が特定できていない。遺物の型式学的研究を進める必要がある。

今回の踏査旅行で新たな遺跡を発見することはできなかったが、遺跡の立地条件として、海岸部に押し寄せる波の状況、食料の供給源としてのリーフの存在が鍵になるとともに、ビティ・レブ島では河口付近を選択して集落が展開している(一方のトンガには河川が存在しない)ことを再確認した。



写真 12 ナツヌク遺跡(西から)



写真 13 ワイケレイラ遺跡(南から)

註

(1) 直子・アフエアキ氏のご教示による。

参考文献

Poulsen, J.1987

*Early Tongan Prehistory*. (2 vols.) Department of Prehistory, Research school of Pacific Studies, The Australian National University. Terra Australis 12.

David V Burley and Sean Connaughton 2007

First Lapita settlement and its chronology in Vava'u, Kingdom of Tonga. *RADIOCARBON* vol.49, No.1, P.131-137

William R. Dickinson and David V. Burley 2007

Geoarchaeology of Tonga: Geotectonic and Geomorphic controls. *Geoarchaeology: An International Journal*, Vol.22, No.2, P.229-259

Nunn, P.D., R. Kumar, S. Matararaba, T. Ishimura, J. Seeto, S. Rayawa, S. Kuriyawa, A. Nasila, B. Oloni, A. Rati Ram, P. Saunivalu, P. Singh and E. Tegu 2004.

Early Lapita settlement site at Bourewa, southwest Viti Levu Island, Fiji. *Archaeology in Oceania*, 39: 139-143.

Patrick D. Nunn, Sepeti Matararaba, Roselyn Kumar, Conway Pene, Linda Yuen and Ma. Ronna Pastorizo 2006

Lapita on an island in the mangroves? The earliest human occupation at Qoqo Island, southwest Viti Levu, Fiji. *Archaeology in New Zealand* vol.49, no.3, P.205-212



写真 14 ボウレワ遺跡(南から)



写真 15 ボウレワ遺跡(東から)